

日本海学講座「定置網の歴史—支え合う海と陸—」

講師：大野 究 氏（氷見市立博物館 館長）

日時：2021年12月18日（土）14:00～15:30

1. 氷見と定置網漁

今年2月、「氷見の持続可能な定置網漁業」が日本農業遺産に認定された。氷見では定置網漁業が400年以上続いており、今も盛んに行われている。これからも行われていくという意味を含めて、「持続可能な」という文言が入った名称での認定となった。

しかし、定置網といっても、ぴんと来る人は多くないだろう。海面に浮きが浮かんでいるのを見たことがあると思うが、その下がどうなっているか、実際に見るのは難しい。

氷見市でも定置網ツアーを実施しているが、早起きして船に乗らなければならないし、波が荒いと中止になることも多いので、なかなか目にするのができない。機会があればぜひご覧いただきたいが、多くの人に現実の定置網を見せるのはなかなか難しい。

氷見市立博物館は、昭和57年（1982年）に開館し、昔の定置網の道具を多く収蔵している。館内で実際の道具を目にするだけで、定置網を身近に感じていただければと思う。当博物館の附属施設文化財センターでは、かつて定置網に用いられていた大型木造船のドブネを1/2サイズで復元したものがあるので、こちらもぜひ見ていただきたい。



2. なぜ氷見の定置網が注目されるのか

定置網漁自体は、日本全国各地で行われている。富山湾を見ても、氷見以外の場所でも例えば滑川のホタルイカ漁のように定置網がある。その中でなぜ氷見の定置網が注目されているかというと、幾つか要因が考えられる。

一つは、富山湾の海底地形である。富山湾はすり鉢状になっていて、最も深いところでは1000m以上の水深となる。黒部、魚津、滑川辺りでは、岸からそれほど遠くないのに急に深くなるのに対し、氷見辺りには大陸棚があって、岸から200mぐらいは浅く、そこから深くなっていく。定置網は沿岸から急に深くなるような場所には設置できないが、氷見には大陸棚があるため、同じ漁場でも複数の網を沖へ向けて設置することができる。これが一つの特徴である。

もう一つの要因は、先ほども述べたように、氷見の定置網漁が400年以上も前から行われている点である。ただ、かつては氷見が定置網発祥の地ともいわれていたが、実は近年の研究で、能登などで氷見よりも古くから定置網漁が行われていたことを示す史料が出てきたため、現在は否定されている。では、どこが発祥の地かというと、研究が進めば進むほど特定するのが難しいのが現状である。

また、氷見には地形的な恩恵がある。その一つが丘陵の存在である。冬の時期、富山湾には北西から強い風が吹くのだが、氷見の場合能登の山々が風を防いでくれる。そのため、東部に比べると比較的波が穏やかで、漁がしやすいことが一つのポイントである。大陸棚があって、北西側の丘陵が冬の強風を防いでくれるという地理的な条件が偶然そろっている

るため、氷見では定置網が盛んなのである。

さらに、富山湾にはあまり島がないが、氷見の沖には虻が島や唐島などの島がある点も重要であり、船を進めるときの目印になる。また、定置網は網場が決められているのだが、海の上には杭が打てないので、別の方法で網場を確認する手段が必要である。そのための目印として使われるのが、石動山^{せきどうさん}などの山である。海から見える所に良い目印があることも、氷見の地形の特徴である。

江戸時代の氷見浦の網場図を見ると、高岡の雨晴と石動山^{せきどうさん}山頂を結ぶ赤い直線が入っており、山の位置を目印に使っていたことがうかがわれる。この網場図では、氷見の南部だけでも10の網場が並んでいる。江戸時代の漁業関係の古文書は、内容のほとんどが網場に関する論争であり、お互いの縄張りを主張し合っていた。網場もいい悪いがあったようで、江戸時代後期になると、公平になるようにくじ引きで網場を決めたという記録も残っており、いかに網場の位置が重要だったかが想像できる。

氷見の定置網の歴史は400年以上といわれている根拠となっているのが、元和元年(1615年)に書かれた書状である。前田利常が宇波村の人に宛てたもので、慶長19年(1614年)に氷見の灘浦海岸で「さわの貳番(2番)」の網場に夏網が下ろされていたことが分かる。夏網とは、夏にマグロを捕る網のことである。このことから、季節ごとに網が下ろされる定置網の基本的なシステムが、慶長19年時点で氷見に確立していたことがうかがわれる。慶長19年といえば大阪冬の陣が起こった年であり、元和元年は大坂夏の陣で豊臣氏が滅んだ年に当たる。その時代には氷見で定置網の基本システムが出来上がっていたのである。

また文禄4年(1595年)、これには「定置網」とは書かれていないが、前田利家の家臣が同じ宇波村の百姓に宛てた書状に、京都にいる利家からの命令として「ブリを17本、塩漬けにして至急京都に届けよ」と記されている。文禄4年は、夏に京都で豊臣秀次が一族もろとも滅ぼされ、秀吉の後継者が秀頼に確定した年である。利家は秀頼の子守役として京都にいた。この文書では網には触れていないが、日付は文禄4年11月7日であり、ブリ漁のシーズンが始まる時期である。恐らくこの頃から定置網でブリを捕っていたのではないかと想像され、もしかすると氷見の定置網の歴史はさらに20年ほどさかのぼれるかもしれない。

3. 定置網漁のスケジュール

現在の定置網は化学繊維でできていて丈夫なので、一年中海に入れているが、昭和30年代ごろまでは敷設時期が決まっていた。正月を過ぎた頃から4月頃までは、春網といって主にイワシやイカを捕っていた。5月ごろから7月中ごろまでが夏網で、主にマグロを捕っていた。そして10月中旬から年末までは秋網といって、ブリやフクラギを取っていた。このように季節ごとに網を入れており、漁は年中行われていたわけではなかった。

では、網を入れていない時期に漁師は何をしていたかというところ、網を作っていた。昔は漁師が自分で定置網を作っていたのである。当時の網はワラで作られていた。農家の人たちは冬仕事としてワラを縄にしていたので、漁師はそのワラ縄を仕入れて、自分で網に仕立てていた。漁師の仕事は、網を作るところから始まっていたのである。従って、休漁中は網の準備をする期間だった。例えば、秋網と春網の間隔は短いので、夏の間は春網の準備もしておくこともあった。浮きや重りも含めて漁期まで保管しておかなくてはいけない

ため、大きな倉庫も必要だった。

ただ、昔は春・夏・秋で魚種によって網の形を変えていたので、例えば春網はそれほど大きな仕掛けでなくてもいいという違いはあった。秋網は、一つの定置網に16名ほどの漁師が必要だったが、夏網は12人ほど、春網は8人ほどで良かった。網元からすれば、春や夏はそれほど人手が必要ではないが、秋の一番忙しいときには人手が欲しくなる。そのため、漁師を株制度にして、1株持っていたら毎日船に乗れるけれども、0.5株だったら2日に1回しか漁に出られないという形にして、一番忙しいときに人が集まりやすいように工夫していた。

では、漁のシーズンにもかかわらず船に乗れない漁師はどうしていたかという、大抵の網元は地主でもあり田畑を持っていたので、そこで働いたり、あるいは釣り業など別の形態の漁に参加したり、長く船に乗れなくなるなら出稼ぎに行ったりして、漁師は半農半漁の形だったのである。

4. 定置網漁で使われた漁具いろいろ

昔の定置網漁では、竹を束ねたものや杉の丸太を割ったものを浮きに使い、岸から沖に向けて伸びる網の奥に、袋のような形をした身網を設置していた。ただ、仕掛けの構造が今よりも単純だったので、魚が入ってもすぐに出ていってしまう。今は網の構造も複雑になっているので、朝に沖へ出て網を揚げてすぐに戻るパターンになったが、昔は船の上に櫓を立てて1人が見張りをし、網に魚が入ったかどうかを見ていた。そして、網に入った魚をすぐに捕まえるため、漁師も船の上で待ち構える必要があった。そのため、船で一晩泊まることも多かった。夜、船の上で待機するために、ワラで作られた1人用テントのような「ノマ」が持ち込まれ、弁当箱に2〜3食分の米を詰めて、捕った魚で汁を作って食べながら過ごしていたようである。

当時の網はワラ製だったので、一度使えば駄目になる。それをどうするかというと、切って海の中に捨ててしまっていた。プラスチック製であればごみになってしまうところだが、ワラは自然のものなので、時間がたてば分解されてなくなるし、分解過程でプランクトンが寄ってきて、魚をうまく呼び寄せる餌にもなる。分解前にも、切ったワラが魚礁になって魚が隠れることもあったので、良い循環が生まれていた。現在、氷見ではワラ網は使われていないが、今でも一部にワラ網を使っているのが滑川のホタルイカ定置網漁である。

なお、ワラは漁業以外にもさまざまな用途に用いられていた。例えば、雨が降ったときに使用するバンドリや腰に巻くドウマルなどの「キルモノ」、ムシロのような「シキモノ」、ムシロを袋状にしたカマスや米、砂利などを入れるタワラなどの「イレモノ」、わらじやぞうりなどの「ハキモノ」、そして縄や網に使う「ナウモノ」、その他に土壁補強材や屋根の葺き材、燃料など、いろいろな用途があった。

ワラ以外では、幕末に麻製の網が定置網の身網に使われるようになった。近代になると、綿糸の網が身網に使われ、特にイワシを捕る春網によく使われていた。浮きも、竹を束ねたものや杉の丸太など、山で採れたものが使われていたが、近代になるとガラス製のビン玉が登場した。しかし、そのままだと割れてしまうこともあるので、クッションとしてワラ縄で巻いていた。重りとしては、俵に砂利を詰めたもの（石俵）を使っていた。一つの

定置網に何千という数が必要になるので、女性も含めて一家総出で砂利を詰めて作っていた。

当時、網の敷設や網取りで主に使われていたのが、ドブネという 15~16m の非常に大きな船だった。底は平らで、石俵などをたくさん積んで行ったり、魚をたくさん積んで戻ってきたりすることを想定して造られている。操るのが非常に難しく、乗り心地も良くなかったといわれている。動力船ではなかったため、近代になってエンジン船が登場すると、エンジン船に引っ張られて網場へ行き、櫓や櫂で微調整して動いていたそうである。一つのドブネには 10 人程度が乗ることができた。江戸時代の絵図には三つぐらいしか描かれていなかったが、近代になると一つの定置網に 10 艘ぐらいのドブネがついていったので、一つの定置網に 100 人以上が携わるといふ大規模なものになっていったことが分かる。

氷見のドブネは現存していないので、当博物館では 2 分の 1 サイズで復元した。氷見の船大工もわずかしか残っておらず、70 歳代の現役の方をお願いして、平成 28~29 年の 2 年間で造ってもらった。原寸ではないのは、資金的な問題と、今では大きな杉が手に入らないこと、そして 1 人の船大工で作業するのは難しいという理由である。2 分の 1 サイズではあるが、それでも長さは 8m もある。

この製作過程は、写真や動画で記録に残している。そのうちドブネの本質を最も表しているのではないかと思うのが、船の底を製作している時の写真である。船底が平らな板状で、舳先が少し上がっている状態になっているが、特徴的なのはドブネの側面に当たる部分である。船の両側に、板ではなく杉を半裁したものを取り付けている。漁師が魚を揚げるとき、船の片側に 10 人が 1 列に並ぶことになるのだが、それでも船が傾かないのは、船の両側の杉の木の浮力が大きく、安定しているからである。

その他にも、板同士を合わせるときに水漏れが起きないようにハンマーでたたいて木の繊維をつぶすといった技がある。また、漆を接着剤に使ったり、板の境目にチキリと呼ぶ材を打ち込んだりするなど日本海側独自の技術も用いられている。かなりの材が必要で、昔はドブネ一つを造るのに家一軒のお金がかかるともいわれていた。

当博物館では、漁師からいろいろなものを寄贈していただいて、さまざまなものを収集している。先ほどワラ網も切って捨てていたとお伝えしたが、漁師は要らないものをすぐに捨てるので、船も使わなくなればすぐに壊したり燃やしたりしていた。そのような中でも、漁具を後世に伝えなければならないと考えて集めた結果、当博物館が収蔵する「氷見及び周辺地域の漁撈用具」2853 点が国の登録有形民俗文化財に登録された。中には定置網の道具だけでなく、捕れたイワシを肥料にしたり塩ブリを松本まで運んで販売したりするための加工関係の道具や、船大工の道具、櫓大工なども含まれている。

現在、特に意識的に集めているのが木造の和船である。海船だけでなく、川や潟で使われている船も含めて 30 艘以上が集まっている。集めてみると同じ和船でもいろいろなタイプや用途、技術があることが分かってきた。置き場所には困っているが、現在は廃校になった学校の体育館を使って収蔵している。

5. 定置網の持続可能性

現在の定置網は、昔と違って複雑な形をしている。簡単にいえば、入り口が広くて奥が狭い構造となっている。登り網といって、入り口側から出口に向かって徐々に浅い方へと

狭めていって身網に落ちる形になっているため、ある程度深い所を泳ぐ魚が一度入ると出にくい形状になっている。この構造を落とし網という。氷見で生まれた構造であり、これが全国各地で採用されていった。氷見の定置網が全国に広がるきっかけになった構造ともいえる。なお、最近では身網を二重、三重にして、魚種をより分けるなどの改良が施され、材料も変遷している。このように改良を進めながら、定置網のシステム自体は400年以上も続いているのである。

ただ、昔と同様に入り口は開けっ放しのままなので、一度網の中に入っても登り網を通過して身網に落ちない限り、逃げていく魚がいる。一説では入ってくる魚の7割が逃げるといわれている。だが、このように一網打尽にしないところが定置網の良いところでもある。

富山湾で捕れるブリは、北の海にいたものが産卵のために南下してきたものである。従って、富山で全てのブリを捕まえてしまうと産卵できずに徐々に数が減っていき、資源が枯渇してしまう。だからこそ、3割ぐらいしか取れない定置網が持続可能性と結び付いているのである。

また、定置網は漁村だけのものではない。長い歴史を見れば、海、里山、農村などに関わり合い、支え合ってつくられてきた。山で採れるものが浮き材になったり、船になったり、道具になったりしていたし、田んぼで取れたワラが網になったり、漁師が農村で働いたり、捕れた魚が肥料や食料になって還元されたりしていた。

大陸棚や丘陵などの自然的な条件も必要だったけれども、それだけではなく、こうした里山や農村と漁師とのつながりの中で定置網が生まれ、400年以上続いてきたといえるだろう。そのようなところに氷見、富山県の漁業の文化・風土が根付いている。

われわれは魚をスーパーで買っているが、そこで売られている地元の魚は恐らく定置網で捕られた魚が多いと思う。普段何気なく食べている魚の背景に400年以上の歴史がある定置網があり、そして海だけでなく陸との循環システムがあって食卓に並んでいるということをごまかして考えていただければと思う。